学位論文の要約

論文題目　　アドルフ・ロースの建築と思想　―素材から都市へ―

申 請 者　　岸本督司

要約

本論文は、20世紀初頭にウィーンを中心として活躍した建築家アドルフ・ロースを取り上げ、その言説と実作の分析を通じてロースの建築思想とその実作の特質を明らかにすることを目的としている。ロースについては、ウィーンにおける近代建築の先駆者のひとりと目されているものの、言説では批判する装飾的な要素を実作では用いている例もあり、いまだその解釈が定まったとは言い難い。本論文では、そのロースを解釈するうえでの重要な要素として、素材という観点を取り上げる。ロースが建築において素材を重視していたことは既往研究においても知られているものの、具体的な作品の中で個々の素材が果たす役割が十分に明らかにされてきたとは言えない。そこで、ロースが活動した各時代の作品を住宅や商業建築といった建物の用途別に章を設け同時期の論考と照らし合わせつつ検討することで、これまで明らかにされてこなかったロースの素材観と建築思想を実作に即して明らかにする。

本論文は、本論四章とそれをはさむ序論、結論の各部分から構成される。すなわち、第一章「単層住宅における素材と造形」、第二章「住まうことと都市生活」第三章「一戸建て住宅とラウムプラン商業建築と都市空間」、第四章「商業建築と都市空間」である。

まず第一章においてロースが活動の初期に行った世紀末の都市ウィーンにおける装飾の氾濫に対する批判的言説を取り上げ、その根底にある素材重視の姿勢と素材と建築の関係についての思考を抽出する。これを通じ、ロースにとっての建築空間は身を包む衣服にもなぞらえられる素材の選定を起点とし、そうした素材によって特定の感情を起こさせるものであるということが明らかとなった。この章ではさらに、そうした建築空間にロースがもたらそうとした効果がどのような素材でどのように発揮されるのかを、同時期のいくつかのアパートの室内空間を取り上げ検証した。結果的に、ロースの室内空間は、座るためのスペースを中心として内向きに区切るような造形が柔らかな素材を用いてなされることで親密な温かみのある空間を作り上げようとされているものの、それが徹底されるほど、住宅に必要な開口部の存在によって密閉が破綻する契機が際立ち、そしてそれによる驚きがかえって新鮮に感じられるという効果が示される。これが最も際立ったのが、ロースが最も「神聖な」空間と位置付けた寝室においてであり、実際にロースは、自身の妻リナのための寝室を設計し公開している。この寝室の分析を通じ、この部屋は聖なる空間にふさわしく柔らかい素材で満たされているものの、その色彩の白さはあたかも触れることを拒んでいるかのようであり、素材の柔らかさという触覚性と、白さという視覚性がせめぎあいを演じていることが明らかにされた。また、後年１９３０年のピルゼンに作られたブルンメル

邸では寝室の壁面が一部別の空間へのドアとなっている造作があることを指摘し、ロースの指向する被覆の完全さが破綻する契機をそこに見出したうえで、別の空間へと意識を向けさせるこうした造作がロースの室内空間において魅力の一つともなっていることが示されている。

続く第二章では、第一次大戦後の社会民主党が第一党となったウィーンにおける住宅不足を解消するためロースが携わった集合住宅建設活動を取り上げ、これまで実りの少ない活動の時期だったとされてきたこの時期の活動に別の側面から光を当て、その意義を浮かび上がらせることを試みている。同時期の言説、すなわち「都会と田舎」（１９１８年）、「住まうことを学ぼう！」（１９２１年）「現代の公団住宅」（１９２６年）といった論考や講演の読解を通して、近代都市の住民へのロースの提言やそうした人々の住まいの在り方についてのロースの考えを明らかにする。また実際にロースが設計した集合住宅も併せて検討することで、この時期のロースの活動には、ほかの時期には見られない直接的な社会参画活動としての意義があること、また建築家としても建設上の条件の厳しさにより自身の建築に必須のものとしての壁体が浮かび上がり、テラスのある住宅というこれ以降顕著化されていく形態上の傾向を実現する契機ともなった意義深い時期であったことを明らかにしている。

続く第三章では、一戸建ての住宅を取り上げ、個々の空間のサイズを操作し組み上げるというロースに特徴的な建築傾向であるラウムプランについて、実作の検討を通じその特質を明らかにする。ラウムプランの複数の空間がつなぎ合わされたような造形においても壁面をなす被覆素材が重要であり、とりわけ空間同士の境界をなす開口部が高さの異なる空間同士で生じる視線のやり取りにおいて公的な空間から私的な空間へと親密さの増していく過程が使用された素材とその造形の検討を通じて具体的に示される。そうした公共性のある空間から隔離されたもっとも私的な空間としての主人の部屋を提示したのち、さらに残された空間、名付けられぬ残余の空間の可能性として壁面の造作を提示する。

本論の最終章にあたる第四章では、ロースの商業建築を取り上げ、住宅とは異なる効果を持たせようとしたであろう作品において実際にどのような素材をどのように用いてどのような効果をあげているのかを示す。最初に取り上げるカフェ・ムゼウムでは、都市の流動性を妨げないように内部も簡素に仕上げられつつも店舗の奥では住宅と同様に親密な空間が確保されていること、一方でそのファサードにより当時の装飾的傾向に対するアンチテーゼとして素材が取り上げられていることを当時の建築評論やロースの発言を参照することで明らかにしている。またケルントナー・バー(1908)では、矩形や直方体といった幾何学的形態で空間を囲むように配慮された大理石などの石素材によってしつらえられた抽象性の高い内部に対し大理石のつけ柱の上にアメリカ国旗を模した看板が乗るというキッチュな外装により繁華街の喧騒からの断絶が図られ、またアメリカ国旗と古代の列柱が合わさったファサードにより新しい文化という他者と伝統の衝撃的な出会いが暗示されてもいることが明らかにされる。最後にロースハウスを取り上げ、物議をかもした住居部分ファサードの無装飾さについてのロースの発言を分析し、住居部分の無装飾はウィーンの伝統にのっとったものであり、商業建築部分は入口から二階への経路上の素材と造形を通じて建物の目的にかなった造作を王宮や教会、繁華街といった周囲の環境に配慮しつつ

成し遂げたものであることを明らかにした。本論文全体を通じ、建築家としてのロースは終生、空間の内と外の調和と葛藤に取り組み、こだわり続けた建築家であったことが幾重にも示され、こうした差異や素材の手触りへの感覚を抹消し、捨象したモダニズム運動の在り方とは異なっているということを指摘して本論は閉じられる。